

ふく ざわ もも すけ
福沢桃介



青年時代の福沢桃介（1867～1938）

出典：『福沢桃介翁伝』

木曾川の激流を止めた男 —水力発電事業に賭けた生涯—

■波乱の青年期から実業界へ

福沢桃介は1868（明治元）年埼玉県荒子村で岩崎紀一の二男として出生。小学校を終え、漢学塾・川越中学（在学中聡明なことから「川越の麒麟児」と呼ばれた）を経て、16歳で慶應義塾に入塾。色白で華奢な体格、ひ弱であったが負けん気が強く一目置かれる存在であった。塾内外でよく悶着をおこし、諭吉に叱られたり諭されることがあった。

当時、諭吉の二女「ふさ」の養子を探していた福沢家では、奥さんと長女が目立ちたがり屋の桃介を選び、渋る諭吉もそれに従い婿養子に決まった。洋行したがっていた桃介は渡米を条件に受け入れた。アメリカでの2年8ヶ月は語学研修の後、鉄道会社で働き始めるが実父母の相次ぐ逝去に落胆し乱れた生活に墮ちる。

帰国後、北海道炭礦鉄道に入社。27歳で結核となり療養生活。この頃から株の取引で利益を上げる。以後、王子製紙、利根川水電、丸三商会、博多電灯軌道等々に関わり実業界での経験を積む。

■「電力王」への道

1908（明治41）年、40歳で豊橋電気取締役となり実績を上げる。この頃から中京圏での経済活動が増え、紆余曲折を経て1913（大正2）年名古屋電灯の常務取締役、翌年取締役社長となる。当時工場での動力源は石炭による蒸気機関が多かったが、電動機に移行する時期で「桃介の煙突退治」と言われた。また1917（大正6）年、設立間もない電気製鋼所（後の大同特殊鋼）取締役社長となる。

50歳代になると、木曾電気製鉄、矢作水力、大阪送電、東海道電気鉄道（後の名鉄豊橋本線）などに関わり、取締役社長・相談役などに就任している。1922（大正11）年、さらに、競争



大井発電所・ダム 竣工当時記録的なハイダム（撮影：田口憲一）

を避けるため日本水電、木曾電気興業、大阪送電を合併させ大同電力を設立し、社長に就任する。

福沢桃介は「一河川一会社主義」を唱え、すでに鉄道が敷かれており豊富な水量の木曾川に早くから注目し、1920年代に大桑・須原・桃山・読書・大井・落合の各発電所を竣工、電源開発に邁進した。電源の少なく、需要の多い大阪に送電することも見据えていた。

福沢桃介は辣腕を振るい余人のまとめ得なかった難題を短期間でまとめるなど、「電力王」の異名をもつ。名古屋・中部地方の経済発展に欠かすことの出来ない人物の一人であった。

（田口憲一）



重要文化財に指定された読書発電所（撮影：田口憲一）